

赤田家の先祖は佐々木六角の家臣であったが、信長との戦いで敗れたので出家して豊郷町に曹洞宗の寺を建立した。一方浅井町の赤田家の祖先は浅井長政の家臣となったが姉川の戦いで敗れたため、武士を辞めて帰農し大庄屋を務めた家柄だ。当家には造園時に使われる滑車などの道具類が描かれスケッチ帳のものがあり、大変貴重な資料だ。

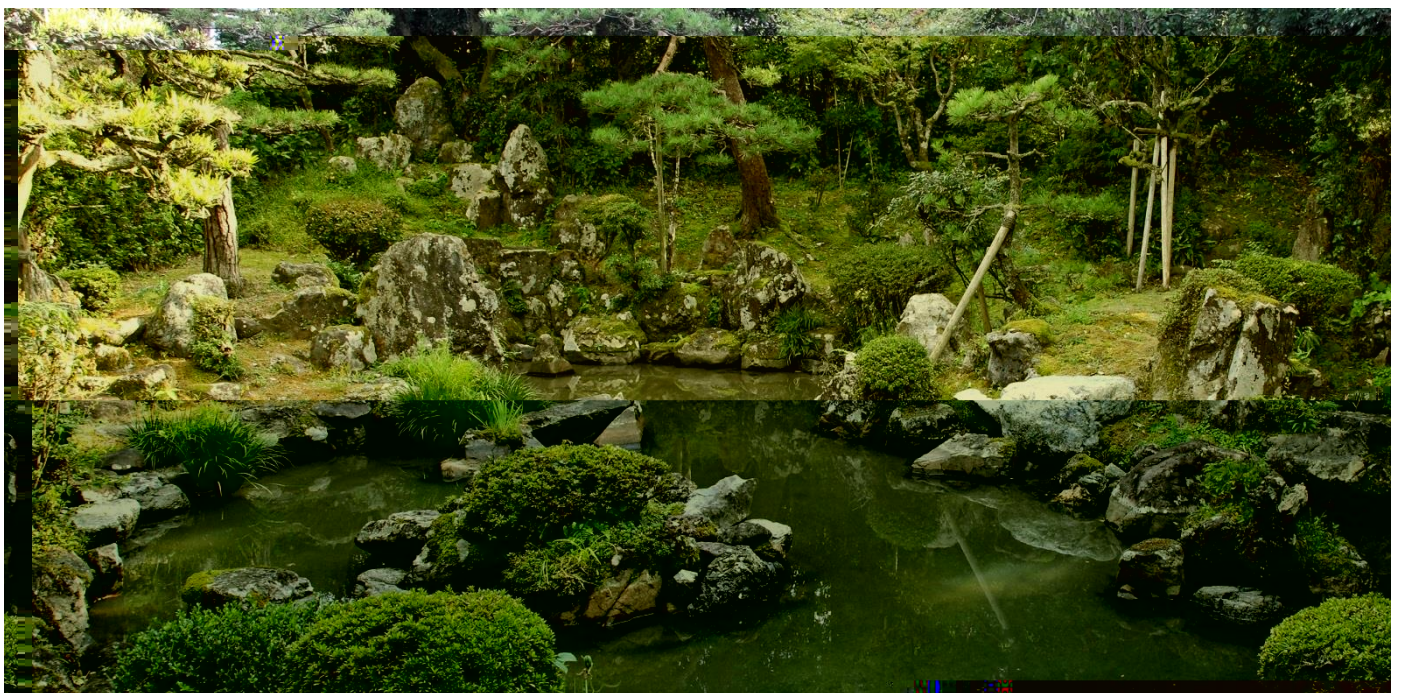
庭園は静かな山里にひっそりと佇んでいた。やや大きめの池には出島と亀島があり、池泉左側の奥まった対岸には築山が築かれ、そこには枯瀧状の石組みがなされている。一方池右奥には形ばかりとも言える滝が落ちている。間口と同じくらいの奥行きのある地割で石組みは画面を横切るような斜線状に生まれ、視線は自然に左奥の築山に誘導される。立石はさほど大きくはないが、鶴島の羽石状の石、滝近くの細長い立石、左側護岸の仏像を象徴したような石、築山には枯滝状の石が分散して布石されている。手前にある石の材質は何処にでもありそうな角のない丸みを帯びた

穏やかな石だが、奥に行くにしたがって角張った立石の構成で、いわゆる逆遠近法の手法である。

特に目立った造形の滝や、石橋などは無いが、奥の築山上にある三尊式枯滝が鑑賞者に迫ってくる。静かな造形であるが、大きなうねりとして枯滝が迫ってくる。逆遠近法の手法である。静謐な滝が龍安寺の精神で満たされている。



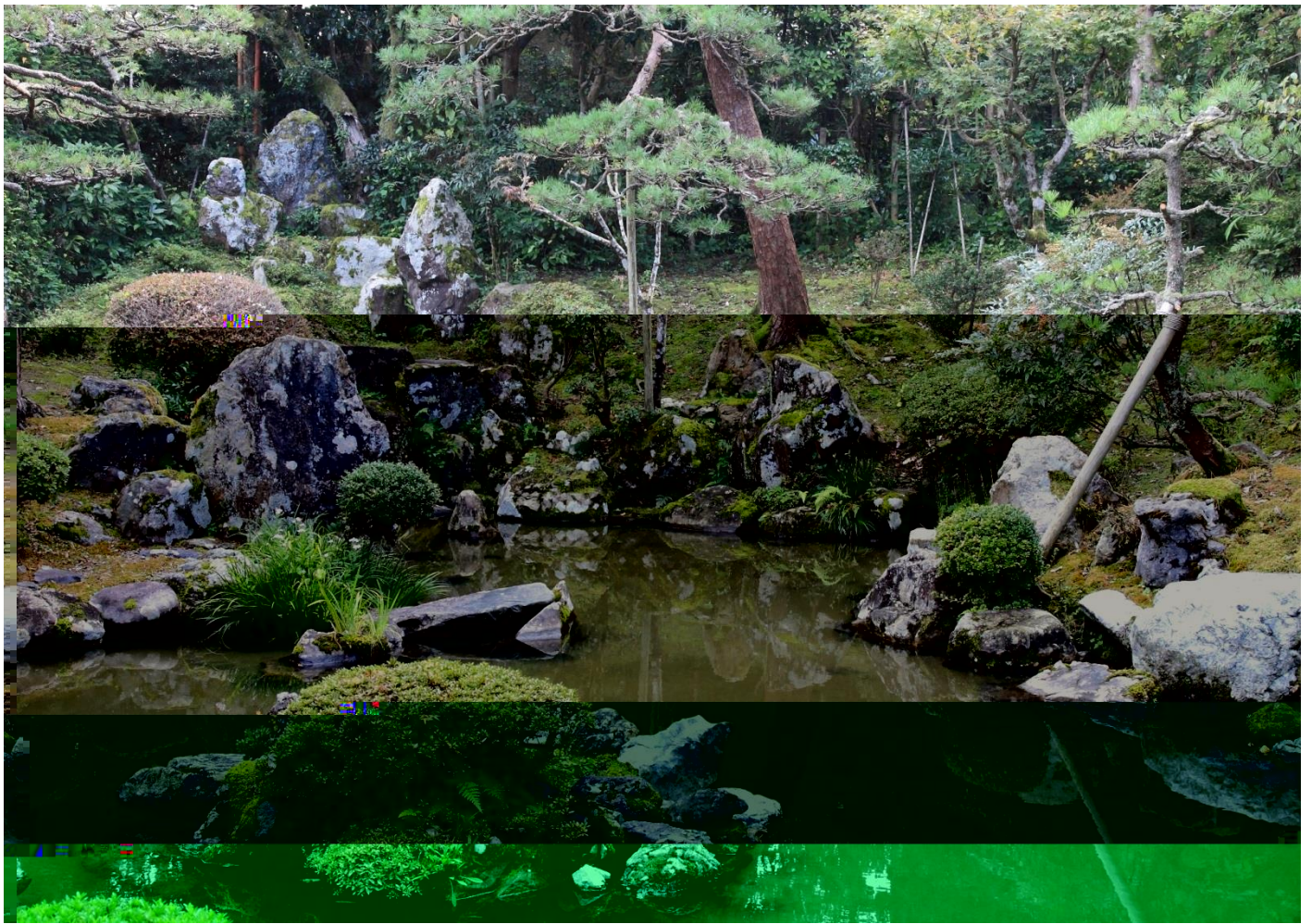
配石は池中の鶴亀島と山畔の護岸、さらに山畔上へと連なった配置をしている。



特に目立った造形が無いので、具象的でなく抽象性の感じられる庭園だ。逆遠近法の構成は、右下の護岸は丸くて横石であるが、左側には大きな石が立ち、築山には護岸から奥に行くに従って大きな石になっている。



赤田家：三尊式枯滝は最奥部にあるが山畔の巨石の石組みで、その存在感を増す手法である。
なお、当池の底には青丹が約 50 c m 敷かれている唯一無二の庭(上澄みの泥を除去すると池底は青くなる)。

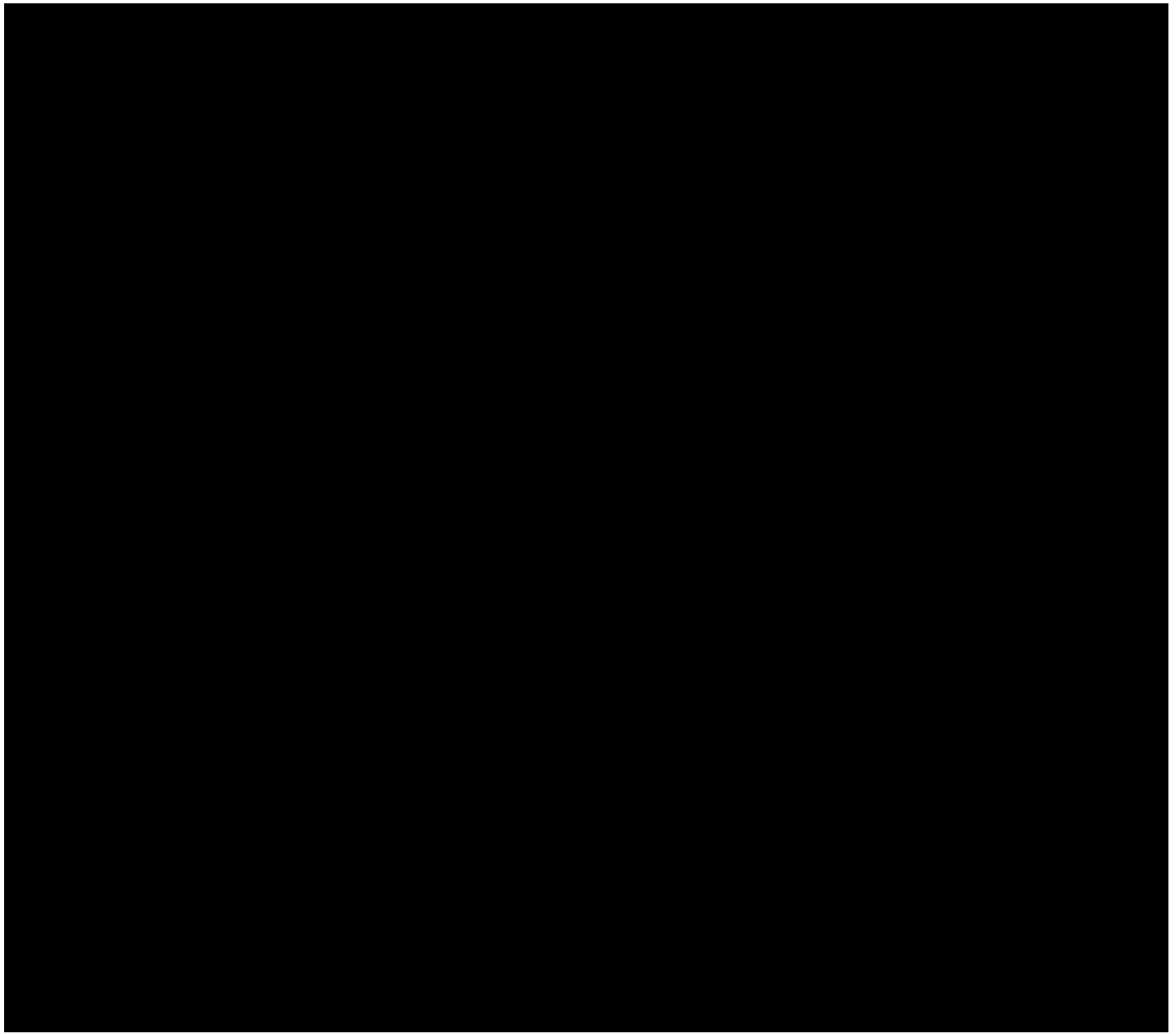


「二河白道」の説法の庭とも云われている。願行寺庭の雰囲気が漂うのは蓮如系庭のためか。



築山と護岸に組まれた石組みは三角形にして、安定性のある地割だ。特に護岸の石組は城壁の様な緻密な作業をしている。

造園の様子を描かせたスケッチ



赤田邸の屋敷図